

ESG評価情報の意義と課題 —行動規範の実践へ—

越智 信仁

目 次

- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1. はじめに | 4. ESG評価におけるAI活用の効用と課題 |
| 2. ESG情報の多様性と比較可能性 | 5. 結びに代えて |
| 3. ESG評価情報のばらつき問題再考 | |

本稿では、金融庁により策定されたESG評価機関などへの行動規範や、そこに至る専門分科会での議論を踏まえながら、ESG評価情報や評価機関をめぐる今後の課題を研究者の視点で論じる。そこでは、多様性と比較可能性の切り口でESG情報などの意義や特質に触れた後、実証研究の示唆も参照しつつESG評価のばらつき問題を再考するとともに、AIを用いたESG評価の進化可能性と信頼性に係る課題などについても論及する。

1. はじめに

ESG（環境、社会、ガバナンス）投資の進展につれESG評価・データ提供機関（以下、評価機関）に期待される役割が増す中で、金融庁 [2021] やIOSCO [2021] では、その評価の透明性や公平性などの課題が指摘された。こうした課題については諸外国でも議論が進む中であって、わが国では2022年に金融庁「ESG評価・データ提供機関に係る専門分科会」（以下、分科会）において検討され、その取りまとめ成果（金融庁 [2022a]）を踏まえ、市中協議を行った上で最終的に「ESG評価・データ提供機関に係る行動規範」

（金融庁 [2022b]）として結実した。そこでは六つの「原則」として、①品質の確保、②人材の育成、③独立性の確保・利益相反の管理、④透明性の確保、⑤守秘義務、⑥企業とのコミュニケーションが掲げられ、その下に「指針」や「考え方」がブレイクダウンされている。

本稿の目的は、上記の行動規範やそこに至る議論、あるいは同様の課題に対する諸外国の動向、学術研究の示唆、信用格付とのアナロジーなどを踏まえて、ESG評価情報や評価機関をめぐる今後の課題を研究者の視点で論じることにある。以下では、まず多様性と比較可能性の切り口でESG情報などの意義や特質に触れた後、次に分科会の議



越智 信仁（おち のぶひと）

関東学院大学経営学部教授。日本銀行勤務などを経て、2021年から現職。京都大学博士（経済学）、筑波大学博士（法学）、日本証券アナリスト協会検定試験合格。日本社会関連会計学会理事、グローバル会計学会理事。書籍・論文により、日本会計研究学会太田・黒澤賞、日本公認会計士協会学術賞、日本内部監査協会青木賞、国際会計研究学会賞、環境経営学会賞（学術貢献賞）、日本NPO学会賞（優秀賞）を受賞。